

6 薬剤耐性対策アクションプランから見る鶏大腸菌症への対応（第一報）

宮崎県都城食肉衛生検査所 ○有川 ^{ありかわ} ^{げんき} 玄樹

食鳥検査において、大腸菌症による廃棄数が多い農場に蔓延している大腸菌の性状と、その発生要因と関連する呼吸器感染症について着目し調査することで、食肉衛生検査所のデータを有効活用した薬剤耐性菌発生対策を検討したので、その概要を報告する。

1 材料及び方法

実際に症状を引き起こしている大腸菌の性状について把握するため、平成 28 年 6 月に食鳥検査された被検農場の肉用鶏のうち、検査において内臓型大腸菌症と判定した肉用鶏（以下、内臓型鶏）12 羽、食鳥検査合格の肉用鶏（以下、正常鶏）3 羽及び変性と判定した肉用鶏（以下、変性鶏）1 羽の肺を検体として用いた。それらを培養し、大腸菌と判定したものは 0 血清型別試験と薬剤感受性試験を行った。

呼吸器感染症の遺伝子学的検査の検体として、平成 28 年 3 月と 6 月に食鳥検査された被検農場の肉用鶏について、正常鶏 8 羽、変性鶏 6 羽、内臓型鶏 26 羽の気管スワブを採材した。そこから RNA 及び DNA を抽出し、その RNA 及び DNA を用いて、RT-PCR (IBV、NDV を対象) 及び PCR (マイコプラズマを対象) を実施した。

2 検査成績

採材した 16 検体から 32 株の大腸菌が分離され、分類不能 8 株を除いた 24 株から 6 種類の 0 血清群が確認された。

薬剤感受性試験の結果、分離株の薬剤耐性パターンは 9 パターンに分類され、1 から 8 薬剤に耐性を示した。被検農場で大腸菌症治療のために用いられている OTC、ERFX にはそれぞれ 15 株、3 株が耐性を示した。

RT-PCR (NDV を対象) 及び PCR (マイコプラズマを対象) はいずれの検体も陰性を示したが、RT-PCR (IBV を対象) では 40 検体中 39 検体が陽性を示した。陽性検体内訳は、正常鶏 8 検体 (100.0%)、変性鶏 6 検体 (100.0%)、内臓型鶏 25 検体 (96.2%) となった。

3 考 察

今回分離された大腸菌の多くが多剤耐性を示しており、鶏肉からの薬剤耐性菌の発生と拡大の危険性が示唆されたが、呼吸器感染症の遺伝子学的検査からは大腸菌症発症の要因までは突き止めることができなかった。

ただ、食肉衛生検査所では今までの疾病対策のための検査結果フィードバックだけでなく、農政サイドと連携して飼養環境の改善を図ることや疾病の発生要因を特定し、対策を講じることで抗菌薬の使用量を軽減させる薬剤耐性菌発

生対策が可能であると考えた。今後も大腸菌症の発生要因について引き続き調査を行い、「安全・安心」な食鳥肉の供給と薬剤耐性菌発生対策に寄与していきたいと考えている。